

〈翻訳〉

ノルウェーにおける自由主義の歴史

オイスタイン・ソーレンセン

(山下泰春・大谷崇 訳)

ノルウェーの自由主義の歴史にいくつかのガイドラインを引こうとするときに、1814年から始めるのは当然のことだろう。この年の5月17日に、自由主義はノルウェー憲法によってある種の制度的な急発展を遂げた。また、現代の独立国家である「ノルウェー」について話すことができるようになるのも、この年が最初である。1814年以前のノルウェーは、単にデンマークとノルウェーの二重君主制の一部でしかなく、その中心地もコペンハーゲンにあった。この連合体制は完全に、今日の自由主義的な思考と結び付けるものからはあまりにかけ離れていた。つまり、この体制は君主が全ての立法権と執行権を握っていた専制君主制だった。形式的に言えば、国家機構には君主の権限行使に対抗できるいかなる機関も存在しておらず、1660年から1814年までのデンマーク・ノルウェーの専制君主制は、ヨーロッパで最も徹底的に行われた絶対主義的体制を手中に収めていた。

◆贈り物としての自由

それにもかかわらず、1814年以前の時期を強調してみても面白いかもしれない。この時期のことは〔一般に〕ほとんど知られていない。しかし、私たちの国内の歴史で、1814年より以前の50年ほど非常に面白く、とてもエキゾチックな時代はない。さらに、この時期はノルウェーの自由主義の特色を形作るにあたって極めて重要な時期だった。この時期が伝統を作り出し、〔自由主義的な〕思想や政治的実践のための強力な枠組みを提供したのだ。

それゆえ、専制君主制を敷いたデンマークから、とりわけあるドイツ人から始める

ことにしよう。1700年代後半は啓蒙主義の時代だった。大西洋の両側で、個人の自由や権利について、経済的および政治的な進歩についての新しい、ラディカルな考えが花開いた。この時代の理論的なスターは、ロック、モンテスキュー、ヴォルテール、そしてアダム・スミスだった。政治的なクライマックスを迎えたのは二回で、1776年のアメリカ独立宣言と、1789年のフランス革命だった。

私たちの故国ノルウェーは、既に言ったように、デンマークの支配下にあり、ヨーロッパで最も厳しい専制君主制の下に置かれていた。しかし、1770年頃からのデンマーク・ノルウェー専制君主制の政治状況は、かなり特別だった。専制君主であるクリスチャン7世（デンマーク王）が、治療が必要なほど頭がおかしい人物だったのだ。形式的には、彼は全ての立法権と執行権を持っていたが、実際には彼は自身が置かれていた環境によって操られており、クリスチャン7世とはうわべだけの統治者であって、親族ないしは他の非公式なアドバイザーたちが実質的な権力を握っていた。1700年代最後の30年の内に、デンマーク・ノルウェー連合の君主は幾度かのクーデターを経験した。それらは、誰かが王に、〔それまで王を操っていた〕アドバイザーが政治から退いたことをサインさせたときに起こった。

同時に、新しくラディカルな自由思想がデンマーク・ノルウェー連合内に浸透した。コペンハーゲンの知的なエリートたちは、ヨーロッパの知的営為に対して好感を抱き、そして事情をよく知っていた。それらの考えに対しては、国内にも重要な基盤があった。1600年代半ばには、既にデンマーク・ノルウェー連合の政治思想において自然法思想が中心的な役割を果たしていた。それは専制君主制を正当化するために用いられていた——しかしそれにもかかわらず、その自然法思想が精神的な伝統の一部として存在していたことは重要である。例えば、通常は喜劇作家で知られるベルゲン出身の作家ルズヴィ・ホルベア（1684～1754）は、1700年代前半のデンマーク・ノルウェー連合の最も主要な自然法理論家でありかつ専制君主制の支持者でもあった。1700年代半ばには、コペンハーゲンの学者たちの間でモンテスキューの思想についての激しい議論があった。

国内のもう一つの伝統も重要だった。デンマーク・ノルウェーの専制君主制では、文書化された法律や国家権力から独立した裁判所があったため、他の大抵の国よりも法的安定性が比較的大きかったのだ。

このような背景からすると、一人のドイツ人の支配は決定的で、それが私たちの国内における自由主義の伝統の出発点に荒々しい印象を与えた。ヨハン・フリードリヒ・シュトルーエンゼ（1737～1772）は、〔デンマーク・ノルウェー〕二重君主制のドイツ領出身の医師だった。彼は当てにならない王のクリスチャン7世の主治医と

して身を立てた。しかし同時に、彼は王妃の愛人でもあり、強い政治的野心をも持ち合わせていた。1770年と1771年の1年半の間、彼はデンマーク・ノルウェー連合王国の実質的な絶対支配者だった。

シュトルーエンゼは、新しい啓蒙思想に熱狂的な関心を抱いていた。彼が国の実質的な権力を握ったとき、大規模で向こう見ずな改革プログラムを開始した。私たちとの関連性で最も注目に値するのは、彼が1770年9月17日に施行した出版の自由に関する法律だ。この日まで、デンマーク・ノルウェー連合内で出版された書物には、事前に厳格な検閲が行われていた。シュトルーエンゼの施行した法は、単に検閲を廃止しただけではなかった。それは、出版の自由に関する法律では世界で最も踏み込んだものだったし、今もなおそう言える。誰もが自身の望むことを、検閲も、制約も、責任条項もなしに簡単に書くことができた。

もっとも、数ヶ月後には一つの責任条項が追加され、法律は少し厳しくなった。それはとりわけ、シュトルーエンゼに対する激しい非難や、彼の王妃との不適切な関係についての明らかな当てこすりなどを含んだ大量のパンフレットの山が原因である。

シュトルーエンゼの出版の自由に関する法は、上からの贈り物として与えられた自由の例である。それは特に、出版の自由の導入に繋がるような、臣民たちからの圧力ではなかった。単に決定的な力を持った国家元首による自由の考えがあっただけだった。

法の理論的な根拠は全て、啓蒙の時代の精神にあった。つまりそれは、表現の自由に対する制限は、人々が真理を発見したり、偏見を取り払ったり、権力の濫用を非難したりすることを妨げるというものだ。中でも特に重要なのが、自由というものが精神的、経済的、物質的な進歩に明確に結び付いていることだった。

シュトルーエンゼは悲しい運命を辿った。彼は1772年の初めに起きたクーデターの最中に罷免され、残忍な手段で公開処刑された。シュトルーエンゼの改革の多くは廃止の憂き目に遭ったが、全てがそうというわけではなかった。〔例えば〕デンマーク・ノルウェー連合での反動が激しい期間があったのにもかかわらず、事前検閲の制度は二度と採用されることはなかった。

◆原 - 自由主義

1784年、新たなクーデターの後、改革派勢力が政権を握った。彼らは、より広い面で、より慎重な方法で、そしてより広範な社会的基盤を持って、シュトルーエンゼの仕事を引き継いだ。1784年以降の時期は、私たちの歴史の中で大きな改革期間の

内の一つである。改革は、自由主義的な思想に強く影響を受けた人物によって実行された。この時期に最も力を持っていた人々の中に、クリスチャン・コルビェルンセン(1749～1814)というノルウェー人がいた。

この改革運動の山場の一つは、1787年から88年のデンマークにおける、いわゆる農業改革である。概して、この改革はデンマークの農村地方の封建制を廃止し、私有財産権に基づくデンマークの近代農業の基礎を築いたと言えるだろう。

専制君主体制がノルウェーの完全私有地権(odelsretten)に攻撃を加えたとき、〔私的〕所有権の原則は同程度に保護されていた。1811年4月5日の指令は、完全私有地権の最終的な廃止へ向けた最初の一步と目されていたのだ。この運動の背後にいた中心人物はコルビェルンセンだった。しかし、専制君主体制の改革運動におけるこの〔完全私有地権の廃止という〕側面は失敗に終わった。完全私有地権は、1814年のアイツヴォル会議で憲法という形で再び採用されることになった。

専制君主体制の内では基礎となった経済的自由主義思想で最もよく知られた例が、1797年の税関法である。歴史家たちは、この法が自由貿易の思想のための突破口であるとの程度言えるのか、これまで重商主義志向だった専制君主制との断絶〔という意味合い〕をどの程度含んでいるかについて議論してきた。その〔税関〕法がかなりの程度国家の税収を上げようとしていたことから、それはいかなる自由主義の突破口とも呼べないとさえ主張する人もいる。

しかし、そのような意見は、自由貿易思想の誤解に基づいている。〔税関〕法の重要なポイントは、国家の税収を上げることにあった。とはいえ税収の増加、ならびに社会の一般的な豊かさの増大は、重商主義の規制を解除したり、諸外国との貿易を解放したりすることによって達成されるべきだった。今日ではそれは動的税制と呼ばれている。1797年の税関法はアダム・スミス思想に完全に従ったものだった。

それは偶然のことではなかった。スミスの『国富論』(1776)は1779年には既にデンマーク語に翻訳されていた。これには、〔デンマーク・ノルウェー〕二重君主制の知識人エリートが、当時の政治的・イデオロギー的文献に関心を持ち続けていたことが明確に表れている。イデオロギー論争は1784年以降勢いを増したが、改革派寄りの専制君主体制は、表現の自由に関してもかなり寛容だった。〔そのため〕1780年代の後半と1790年代の前半に、コペンハーゲンではイデオロギー的な方向に特化した専門誌や出版物で溢れ返った。フランス革命は細かい点まで議論され、1793年および1794年にはジャコバン派の行ったテロルを全面的に支持するような雑誌すら発行されることもあった。

総じて、コペンハーゲンにおける知的環境は極めて開放的で刺激に満ち満ちてい

た。この首都はノルウェーの知的中心地でもあったため、ノルウェーの学生たちはコペンハーゲンへ留学していた。ノルウェーの歴史において1814年世代と呼ばれる世代はとりわけ、こうした風土で彼ら自身の知的およびイデオロギー的な洗礼を受けたのだった。

1700年代後半の啓蒙主義的な専制君主制についてはよく語られる。あらゆる点で1784年以後のデンマーク・ノルウェー専制君主制による統治は、ヨーロッパで最も啓蒙されていた。もちろん、改革運動には一つ重大な制限があった。それは、そこに国家形態としての専制君主制を切り崩そうとするものは含まれていなかったということである。とはいえ私たちとの関連で言えば、1700年代最後の10年に芽吹いた、国内の自由主義の伝統における主要な流れをいくつか提示できるだろう。

その伝統は、表現の自由、自由な意見形成や討論の思想、発言に対する寛容さに重点を置いていた。それはさらに私有財産権の原則、法的安定性、個人の自由にも及んでいた。とりわけ、自由貿易に向けられていた。しかし同時に、そこにはエリート主導という考え方が刻まれていた。その伝統が、政治的デモクラシーの方向へ向けた発展のきっかけになることはなかった。加えて、伝統は強い国家に重きを置いていた。強い国家とはつまり、効率的で、行動力があり、社会において幅広い活動領域を兼ね備えていることを指す。

このエリート主導と強い国家〔という思想〕は、改革を自由主義的近代化という方向で実行するために必要な道具だった。〔自由主義の〕伝統の中には、そのような国家に対する強い抵抗はなかった。むしろ反対に、国家の最高権力の側が、新しい自由主義思想に最も強く惹き付けられていた。

〔これで〕私たちは、官僚主義的でエリート主義的な自由主義について話すことができる。同時期のフランス、イギリス、特にアメリカは、これとは明確な対照をなしている。1814年以前のこの時期を私は、国内の歴史における「原-自由主義の時代 (urliberalistiske epoken)」と呼ぼうと思う。

◆古典的自由主義

当然ながら、新しい自由思想が浸透すると、専制君主制は内部からイデオロギー的に切り崩されていった。これが顕著になったのは、デンマーク・ノルウェー連合国がナポレオン戦争であくせくしていた時期、そしてこの体制が全面的に寛容でいられるほど、あるいは親改革派でいられるほどの余裕を持ち合わせなくなった1800年以後のことだった。

1814年、ノルウェーはデンマークから離脱した。それと同時に、ノルウェーの政治的エリートは専制君主制と袂を別った。5月17日に公布された憲法は、後の11月4日にわずかに改訂された版に置き換えられたものの、政治的水準においても自由主義的な性格を強く有していた。

それは国家装置における権力の分配に重きを置いていた。国家権力は、行政機関（国王と政府）と、立法および承認機関（ストーティング¹）に分割されていた。当時、憲法はきわめて民主的だった。ストーティングは比較的大きな権力を有していた。例えば、国王は訴訟において単に延期する拒否権を持っているだけだった。財産所有者は全員ストーティングへの投票権を手に入れたが、これは実際にはノルウェーの全ての成人男性のおよそ半分が投票する権利を手に入れたということを意味していた。この分野においては、イギリスやフランスのような国と比べると非常に対照的である。

同時に、憲法は後期専制君主制の重要な特徴を残していた。表現の自由、法的安定性、私有財産権が成文化されたのだ。より控えめでかつ曖昧だったが、職業の自由や信仰の自由も同様に成文化された。

こうして、ノルウェーでは1814年に自由主義的な思想が憲法上に根付いたと言えるだろう。それは決定的な突破口だった。しかし自由主義の文脈においては、憲法にはまた限界もあった。ノルウェー憲法には、例えば1789年のフランスの人権宣言のような権利宣言は、原則的に含まれていなかった。既に述べたように、個々の権利には何かしらの留保が伴っていた。例えば、信仰の自由の条項だったはずのものには、ユダヤ人、修道会、イエズス会に対する禁止が含まれており、信仰の自由は酷く損なわれていた。さらにノルウェーの事実上のエリートである公務員には、憲法において特別な地位が与えられていた。そして、これも既に述べたように、〔農民を理想とするような〕農民に対する進歩的ロマンティズムの雰囲気の中で開かれたアイツヴォル会議で、完全私有地権が再導入されたときに、私有財産権は弱体化したのだった。

1814年から1884年の期間は、ノルウェーにおける古典的自由主義の時代である。ノルウェーの歴史家たちの間で、この時代は〔歴史家の〕イェンス・アルプ・サイプ（1905～1992）による表現を使って「公務員国家（Embetsmannsstaten）」として知られている²。政治的に見れば、この期間は国家の実質的な権力を公務員が掌握し、かつ保持していた時期として特徴づけられる。ノルウェー社会には他の土着のエリートはいなかったし、エリート側に属する官僚層から、民主化についての思想が出て来ること

1 ノルウェーの国会のことを指す。

2 Embetsmann には上級役人という意味合いが含まれており、日本では「官僚国家」とも言われている。

もなかった。

一部の歴史家、何よりもまずフランシス・セイレステッド（1936～2015）は、この時期はハイエク流のブルジョア的法治国家という思想によって特徴づけられているとも力説している。多かれ少なかれ、政治エリートたちには、社会における国家の機能は制限されるべきであり、国家の決議は予測可能性や平等な処遇というような超法規的な規準で拘束されるべきであるという通念があった。

ノルウェーの歴史におけるこの古典的自由主義の時代において、自由主義とは——広く緩やかな意味で——イデオロギー的なヘゲモニーを握っていた。この広範なイデオロギー的枠組みの内部では、さまざまな傾向性や政治的方向性を指摘することできる。自由主義的ではない他の思想の要素すらも見て取れるだろう。しかし全体的には、自由主義思想には強大な権威や影響力があったため、あらゆる政治的討論や議論にそっと表れては、その痕跡を残していた。

1814年から1884年のノルウェー政治のメインストリームは、専制君主制下での原-自由主義の継続と見なされなければならない。啓蒙された自由主義志向の公務員は、1814年以前の国家を実質的に統治していた。彼らは1814年以後も同様に、実質的に統治し続けた。政治的には、ノルウェーはスウェーデンと連合していたが、その連合は非常に緩く、ノルウェーはほぼ完全な内部の自治を手にしていった。コペンハーゲンおよびデンマークとの紐帯は1814年に断られたが、エリートたちは依然としてヨーロッパ思想の潮流と密接に関わっていた。

ノルウェーの古典的自由主義の全盛期は1840年から1870年の間である。1814年から1840年までは、新たな公務員体制はスウェーデン王との政治的連帯および対立によって特徴づけられていた。1870年以降、この体制は衰退し始め、純粋に防衛的な立場になった。しかし、全盛期においてこの体制は、積極的で効率的、そして権威主義的な国家権力に推進されて、近代化ならびに改革運動を展開したが、それらは同時に制限された権力だった。

一方でその改革運動は、古い障壁や経済的特権を切り崩すことによって、より安定した、自由な経済基盤を獲得しようとしていた。国家の指導者たちは、ノルウェーの国内に市場を作ろうと考えていた。さらに重要で印象的なのは、海外の関税という壁を取り壊し、廃止しようとしたことだった。

◆近代化の推進

近代化運動が特に推進していた分野が二つあった。それは一方では、道路や運河、

鉄道や電信機などの交通分野を拡充することだった。国家はアダム・スミスの思想に則り、交通分野の拡充に積極的に努めていた。また他方では、1800年代半ばにノルウェーで急速に拡大した、大規模な商用ルートである海運を拡充するための条件を作り出すことが課題だった。ノルウェーの公務員エリートたちには、世界の用船主^{オペレーター}としてのノルウェー、世界中の全ての海に浮かぶノルウェーの帆船、海岸沿いにある全ての港や入江にあるノルウェーの船舶業者や造船技術者たち、というような考えがあったのだ。

これらの考えはまたしても、進歩に対する信念や発展に対する楽観主義に特徴づけられる、根本的なコスモポリタニズムに根差している。その観点は、自由貿易、平和、淀みのない経済成長および豊かさ〔といった発想〕が占めており、国境というものがより一層重要でなくなった世界である。

例えば、1840年から1870年の時期におけるノルウェーの二人の重要な政治家および政治思想家である、アントン・マルティン・シュヴァイゴー（1808～1870）とフレデリック・シュタング（1808～1884）にはそのような考えが見出せる。両者とも1830年代のいわゆる知識人サークルに所属しており、詩人のヘンリーク・ヴェルゲラン（1808～1845）の〔ような人物の〕強力な敵対者として頭角を現した。シュヴァイゴーは古典派経済学理論と自由主義的イデオロギーに精通した、法学者兼、ノルウェーで最初の社会経済学の教授として大成した。シュタングも同様に法学者だった。シュヴァイゴーが政治活動に積極的だった頃でも、ストーティングの議員以上のものになることを考えていなかった一方で、シュタングは大臣を務めており、何年にもわたって首相でもあった。極端に言えば——とはいえそこまで極端だった訳ではないのだが——、自由主義が全盛期を迎えていた頃のノルウェーを統治していたのは、この二人であると言える。

同時に、シュヴァイゴーもシュタングも、古めかしい権威主義的なエリート主導の支持者だった。彼らにとっては最も優れた者による統治は当然のことであり、場合によっては政治的な強制を用いることも同様に自明視していた。それどころか、政治的な民主化に対して拒絶的な反応を示してさえもいた。

この権威主義的でエリート主義的な〔自由主義の〕メインストリームと並行して、私たちは公務員国家時代のノルウェーにおけるオルタナティブで対抗的な自由主義の流れについて話すことができる。1830年以降の、いわゆる農民反対派（bondeopposisjonen）はストーティングに対して政治的抑止力としての要素を備えていた。当初、ノルウェーの農民政治家は政治システムの変革を望んでいなかった。彼らにはある種の反国家的な性質があり、利害関係の駆け引きにせせせと励んでいた。

〔農民政治家たちが〕主に望んでいたことは、中央集権的で権威主義的な国家に対して、できるだけ波風を立てないでいることだった。〔例えば〕初期の頃の農民政治家にとっての政治的勝利とは、1837年に地方自治権——^{フォルマンスカプ}参事会法——が導入されたことだった。もう一つの勝利は、それとほぼ同時期に直接的な国税が廃止されたことである。とはいえどちらの改革も、指導的な公務員の指揮の下で行われた。農村部の政治とは、よく言われるように、とにもかくにも利害関係の駆け引きである。しかし経済的自由主義の考えと、農民政治家たちが自身の利益と解釈していたものは大方一致していた。それは小さくてちっぽけな国家権力という考えで、また農村部における貿易を自由化するような改革プロジェクトでもあった。

この文脈において共通して言える重要なことは、利害関係は常に理念を通じて表現される必要があるということだ。1800年代半ば、自由主義の理念には相当強力なヘゲモニーがあったため、農民の利害関心は自由主義的な言説を通じて繰り返し正当化されていた。

そうは言っても、優勢だった農村政治は明らかに日和見主義的だったということも強調されなければならない。ストーティングの農民たちは都合に応じて、関税という壁に賛成に回ったり、反対に回ったりした。より正確に言えば、自分が生産するものに応じて、賛成したり反対したりした。一般的に、穀物を生産する東部の農民は、穀物の厳格な関税に賛成し、一方の西部の農民はそれに反対した。これがバターに対する関税になると、事情は逆転した。ストーティングに所属する、より理論志向の公務員は、そのような政治分野でも彼らの考えを表明できるよう、駆け引きのための策をより多く講じる必要があった。

思想の自由に関する問題において、ほとんどの農民政治家は不寛容な態度をとった。同様に、彼らは完全私有地権が廃止されるのを防ぐことにも成功している。1850年代に、シュヴァイゴー率いる自由主義的な公務員たちが、専制君主制の改革運動をこの分野で続けようとしたとき、彼らはストーティングにおいて制度上の過半数の議席を獲得することができなかった。とはいえそれは、1857年に完全私有地権をただ廃止することについての過半数であって、農村部での私有財産に対するそのような賛成は、今日に至っても見られていない。

もちろん農民の政治家たちの中にも、より一貫して自由主義的であるように見える人もいた。その中心的な人物の名前はセーレン・ヨーベック（1814～1894）と言い、1845年から1890年までストーティングの議員だった。ヨーベックは独学で徹底的に本を読んだ、急進的で筋金入りの自由主義者だった。彼は鉄道の敷設や、ビョルンス

ティエルネ・ビョルンソン（1832～1910）に対する芸術手当³、あるいは農業学校などのような、国家の支出を増大するためのほとんど全ての試みに対して反対票を投じていた。制度的な観点からすると、ヨーベックは過激派で、公務員主導のやり方に鋭い牙を向けていた。彼は絶えずより民主主義的な方向へと移り、挙句には共和主義者であるときえ言われることもあった。ヨーベックの最盛期は1860年代から70年代である。この時期に彼は、農村政治のさらなる過激化に寄与した。

ともあれヨーベックも、自身の主義ドクトリンに完全に準じていたわけではなかった。彼もある程度は利害関係の駆け引きに感化されていた。例えば、彼は安定した低金利政策の支持者だったが、それは例外のことだった。ヘゲモニー主義的でエリート主義的な公務員による自由主義と比較して、ヨーベックは他の誰よりも別様オルタナティブの自由主義を体現していたというのが、主な見解である。

◆自由主義の衰退

1884年、ノルウェーにおける公務員指導が打倒され——より端的に言えば——議会議制度が導入された。旧体制を打倒したのは、幅広い党派から構成された連合、つまり異なる政治的急進派からなる連合だった。セーレン・ヨーベックはこの〔幅広い〕連合に属していた⁴。しかし彼の時代はもう過ぎており、彼が打ち出した自由主義的な代替案オルタナティブは政治的な影響力を発揮することはなかった。それどころか、自由主義は押し戻されることになった。〔自由主義の〕政治的ヘゲモニーは失墜した。ここ100年のメインテーマは、ますます強くなる国家権力およびその影響範囲の拡大だった。

農民反対派の急進的な要素は、社会的急進主義の方向に、つまり社会における経済的および社会的問題を解決するために国家を積極的に利用したいという急進主義の方向へ発展した。国家にとって全く新しい使命が、ますます政治的思考においては支配的になった。それは要するに、社会の構成員たちの間の財産の、直接的かつ体系的な配分を通じて社会的平等を生み出すことだった。政治的および社会的民主主義についての考えは、多くの関係者アクターおよび多くの分野において、個人の権利の上位概念となった。

それと同時に——これが重要でないことということはないのだが——1700年代と1800年代の自由主義者たちの考え方の重要な要素が生き残っていた。つまり表現の

3 1863年から1962年まで行われた、ノルウェーの優れた芸術家に対する特別手当のこと。

4 ヨーベックは、1888年に設立された穏健左派党（Moderate Venstre）に所属していた。

自由、結社の自由、信仰の自由、法的安定性についての思想である。また、私有財産権の概念も相変わらず中心的だった。新たな歴史のおよび政治的文脈においては、こうした考えが開発され、希釈され、適応されることになった。それは例えば所有権の場合には明白である。しかしそれにもかかわらず、所有権の考えはノルウェーにおいて、イデオロギー的・政治的文化の重要な一部となった。

昔ながらの自由主義の主流派たちはある程度生き残り、1884年から1914年の時代の新たな状況に順応した。社会経済学分野では、古典的経済学の教義が常に遵守されていた。〔ここから〕私たちは、政治における右翼、保守党(1884～)および自由民主党(1909～)において強力な自由主義的要素を見出すことができる。特に、自由民主党を取り巻く環境は、思想の自由や個人主義に、そして権威主義的な民主主義への態度に対する反感に強く結び付いており、このことは当時における主要な「問題」である禁酒問題(avholdssak)⁵と言語問題(målsak)⁶に例示されている。こうした環境において、私たちは当時の偉大な政治的「酋長」である、クリスチャン・ミッケルセン⁷とフリチョフ・ナンセン⁸を見出すことになる。

このような環境では、自由貿易に対する擁護(例えば、保守党首相フランシス・ハ

-
- 5 1800年代前半のノルウェーでは、アルコール消費量の増大が社会問題となり、1830年代になるといわゆる「節制協会(måteholdsforeninger)」が出現する。これはイギリスやアメリカの禁酒運動を参考に生まれたものだったが、決して完全な禁酒を呼びかけるものではなかった。だが、1859年にノルウェーの教育者・社会改革者のアスビョルン・クロスターが国内初となる完全禁酒協会を設立すると、運動は急成長を遂げ、第一次世界大戦が起こった1914年からは立て続けに蒸留酒やワインなどの販売や提供が禁止されるようになり、1927年になるまで続いた。
 - 6 ノルウェーにおける国語をめぐる問題。デンマークとの連合解消後、ノルウェーは文化的にもデンマーク語からの影響を逃れようと、自国の言語を発明する機運が高まっていた。一方では、デンマーク語からの影響をある程度残しつつも、それにノルウェー独自の語彙を加える「リクスモール(riksmål; 国語)」が、そしてもう一方で、デンマーク語からの影響をほとんど受けてこなかったノルウェー西部の言語を基盤に、新しく発明した「ランスマール(landsmål; 地方の言葉)」が発明された。1850年代以後、長らくの間どちらがノルウェーの「国語」に相応しいかの論争が巻き起こっていた。これらが、現在のノルウェーの二つの公用語「ブークモール(bokmål; 書物の言葉)」と「ニーノシュク(nynorsk; 新ノルウェー語)」にそれぞれ発展した。
 - 7 1857年生～1925年没。ノルウェーの海運王・政治家。1905年から1907年までノルウェーの初代首相を務め、1905年のスウェーデンとの連合解消の際に中心的な役割を果たした。
 - 8 1861年生～1930年没。ノルウェーの探検家・動物学者・国際政治家。北極探検のパイオニアで、探検成功後は難民活動にも精力的に取り組み、1922年にノーベル平和賞を受賞する。

ーゲルupp (1853～1921) のような人物) も見出せるが、指導的な役割を担った政治的傾向は全く別の方向へと進むことになった。ノルウェー独自の自由主義の伝統から引き継いでいたものは、とりわけ個人主義的な態度と自由主義的な考えの要素が、エリート思想および、強力で権威主義的、そして効率的な国家による指導への欲求と結び付いていた点が挙げられる。しかし、そこには重要な何かが欠けていた。それはつまり、シュヴァイゴーやシュタングの相続人たちには、近代化およびラディカルな衝動が欠けていたのだ。その代わりに問題となっていたのは、既存の社会秩序を防衛する闘争、つまり民主主義からの、そしてますます巨大になりつつある、社会主義の台頭からの脅威に対する闘争だった。

◆戦間期

第一次世界大戦およびロシア革命の後には、自由主義の影響を受けた保守陣営の一部が、社会主義の脅威に駆られて、ヨーロッパで台頭した新しい権威主義的体制に媚を売るようになった。これはとりわけムッソリーニのファシスト・イタリアが該当した。こうした二重性、つまり個人主義的な基本姿勢と権威主義的体制に対する誘惑との間の揺れ動きは、詩人のニルス・シェーア (1870～1924) が尖った形で表現している。彼は一方では、ムッソリーニの権威主義的で集産主義的な国家を掛け値なしに賞賛することができた。「一つの民族が支配することはできないし、またするべきではない。……一人の男に我々を支配させよ」と、1923年に彼は書いている。

その一方で、シェーアは一貫した個人主義を表明していたため、アルコール禁止政策についての国民投票の参加を拒否した。「私が何を飲むべきか、あるいは何を信じるべきか、それは大多数にとっては関わりのないことだ。……それは私自身以外の誰にも関わりが無い」と、彼は宣言した。国民投票を受け入れた、〔アルコール〕禁止の反対者たちを、彼は原理的に批判した。「彼らには個人の自由についての考えが抜け落ちていた。彼らは過半数に何かを決定する権利を与えたのだ、過半数には関係のない何かを。つまり、市民一人一人が何を飲むのが許されるべきかということについて、過半数が決めることを認めてしまったのだ」。

この権威主義的体制への媚び売りはただの媚び売りだった。自由主義的な思想、つまり個人主義的な姿勢が強すぎたのだ。しかし、第一次世界大戦後に訪れたこの緊張は、同時にノルウェーの伝統的な自由主義の主流における大きな特徴をなしていた。長期的に見れば、1800年代のノルウェーの自由主義は、他の多くの国々よりも国家との親和性があったように思われる。その一方で、戦間期のノルウェーの保守陣営

は、他の多くの国よりも権威主義的・ファシスト的な思想にあまり関心がなかったようにも見えるかもしれない。

1930年代はノルウェーで、ヨーロッパで、そして世界でも、自由主義が最も暗かった時代だった。国家による解決策が、右でも左でも重視されていた。全体主義の思想が著しく高まっていたのだ。その10年は、資本主義や古典経済学にとっても険しい危機の時代でもあった。危機はとりわけ広範な失業というかたちで現れた。資本主義システムはもはや機能していないようだったし、古典経済学の理論もその問題に解決策を与えることができないように思われた。そうした解決策は、国家による包括的な指揮および管理にあるように見えた。計画経済という言葉が、多くの政界人たちの流行語になった。スターリンのソヴィエト、ヒトラーのドイツ、ムッソリーニのイタリアは、見たところ政治的民主主義〔を選択した他の国々〕と比較して成功を収めているようだった。ジョン・M・ケインズは、より穏やかなかたちで、経済に対する国家介入のための理論的根拠を提供した。ノルウェーでは、自由主義がますます押し戻された。社会経済学者たちの間では、ケインズ派と計画経済派の考えが盛んになった。「祖国」グループは、自由民主党の周りを取り囲む党派の一種の延長で、自由主義は死んだと宣言し、計画経済やコーポラティズムによる解決策を提唱した。産業界でも著名な大物たちは、自由主義の立場から離れ、ますます国家の介入を受け入れた。

概念としての自由主義は、何よりもまず自由党に、そしてとりわけ『日刊新聞(Dagbladet)』紙との繋がりを意識していた党派の人間に結び付いていた。しかしその自由主義は完全に希薄化されており、古典的な自由主義の立場からは完全にかげ離れていた。イデオロギー的には、思想の自由や政治的民主主義を擁護していたものの、他の点では社会のほぼ全ての分野において、国家による解決策を口にしていた。

政治的に全くの部外者^{アウトサイダー}の立場からであれば、小さな環境下においてのみ私たちは、純度百パーセントの古典的自由主義を見出すことができるだろう。このイデオロギーの中心地は、トリグベ・J・B・ホフ(1895～1982)が1935年から編集長を務めるようになった専門誌『セールスマン(Farmand)』だった。『セールスマン』は、経済の自由を方針に掲げていたビジネス雑誌だった。しかし、ホフが買い取ってからは、その雑誌は広く一貫して自由主義的な考え方が特徴となった。ホフは社会経済学の学位を持っていた。彼の博士論文である「社会主義圏における経済評価」(1938)は、社会主義の計画経済の根本的批判を行い、1930年代末のノルウェーにおける社会経済のメインストリームから明確に離れることになった。そうした理論的背景および政治的アウトサイダーの立場により、トリグベ・ホフは国内の重苦しい自由主義的伝統か

らは比較的解放されていた。1700年代後半から、そして1800年代からの官僚的な、国家に親和的な自由主義は彼に特段目立った痕跡を残すことはなかった。

『セールスマン』に対するホフの大局観は、反自由主義の時代において自由主義の旗幟を高く掲げることだった。「これは世界観の問題であり、今現在勝っていると思うかどうかにかかわらず、そのために闘う」のだと、彼は1936年に書いている。ホフは志を同じくする海外の人々と良い関係を築いた。その関係は彼が第二次世界大戦中、アメリカに一時期滞在していた際に強化されることになった。ドイツ占領下のノルウェーで、ホフは『セールスマン』が、国内の報道機関として初めて1940年の夏にドイツ当局によって全面的に禁止されるのを体験した。ちなみにホフは1942年の数か月間、グリニ強制収容所の囚人でもあった。

◆戦後期

第二次世界大戦後の期間も、ノルウェーにおける自由主義の全盛期とは明確に言えないだろう。これはとりわけ1980年頃までの期間についてが当てはまる。1945年以降の主な社会的傾向は、国家の権限や国家の支出の分野での爆発的な成長だった。二つの明確な目的のために、福祉国家が築かれた。まず一つに、全ての市民に、比較的高水準の社会保障を提供するためと、もう一つに社会的・経済的平等を確保するためだ。社会経済学が理想としたのは、私有財産権への強力な介入を伴う、政治的に統治され組織化された資本主義だった。社会経済学の分野ではケインズ経済学や計画経済学を志向する傾向が強く、ラグナル・フリッシュ⁹、トリグベ・ホーヴェルモ¹⁰、レイフ・ヨハンセン¹¹などが有名である。また同時に、指導的な役割を果たしていた社会経済学者と、指揮を執っていたDNA¹²の間には緊密な関係性があった。

他方で、非民主主義的で全体主義的な解決策は、ヒトラーの国民社会主義によって、そしてある程度はスターリンの共産主義によって、完全に信用を失った。1945年以降のノルウェーの社会は、比較的大きく思想の自由や表現の自由が確保されてい

9 1895年生～1973年没。計量経済学の祖で、1969年に初のノーベル経済学賞受賞。マクロ経済学・ミクロ経済学を考案した人物とも。

10 ノルウェーの経済学者。1911年生～1999年没。フリッシュの弟子で、計量経済学を発展させ、その基礎理論を構築した。1989年にノーベル経済学賞を受賞。

11 ノルウェーの社会経済学者。1930年生～1982年没。フリッシュやホーヴェルモと併せて、オスロ学派の旗手として知られる。

12 ノルウェー労働党 Det norske Arbeiderparti の略称。

たことが特徴的だった。さらに、関税保護主義の潮流も、1930年代におけるそれよりも弱まっていた。

自由主義の状況については、ホフは1940年に彼が中断したところから再び出発していた。『セールスマン』は依然として自由主義的イデオロギーの中心地だった。その著書『平和と未来——自由主義政治の道』(1945)の中で、ホフはより詳細にマニフェストを発表した。そして国際的にもホフは彼の同志との関係を絶やさずにいた。フリードリヒ・フォン・ハイエクが1948年にモンペルラン・ソサイエティー¹³の主導権を握ったとき、ホフは創立者の一人として招待された。

非社会主義陣営の政治状況においては、DNAの計画経済思想に対し、いくらかの抵抗感があった。保守党には依然として自由主義的な要素はあったが、これらの要素はしばしば漠然とした、希薄なたちで存在していた。これは1950年代初頭の、いわゆる委任法をめぐる論争で特に表れている。保守党の周辺、および内部では自由主義的な思想が「リベルタス (Libertas)」という組織で研究され、涵養された。その組織は1947年に設立されたが、いくらかややこしいスタートを切ることになった。〔というの〕その設立は秘密裏に行われたために、1948年には労働党新聞がこの組織を、ノルウェーにおいて秘匿されていた、ビジネスのための利益団体であるとして大々的に暴露したためである。

次第に「リベルタス」は研究センターを設立し、自由主義的な内容の本やパンフレットを数多く出版するようになった。もしこの組織が自由主義に対する明確な親和性があったとするなら、保守的な文脈で言えば『ミネルヴァ』誌の周辺一派が、ある種のイデオロギー的片割れをなしていた。1960年頃、『ミネルヴァ』派は自由主義に対してイデオロギー的攻撃を続けており、自由主義思想が政治的復活を果たすというような兆しはほとんどなかった。

◆自由主義よもう一度？

1970年代の初め——より正確には1972年に——、当時頭の切れる観察者だった政治学者、オイヴィン・オステルー(1944～)は、自由主義の運命を次のように皮肉たっぷりな表現で描写することができた。「しかしビジネス的な自由主義と、国家介入に対する原則的な反対は、今日では『朝刊 (Morgenbladet)』誌の文化欄や「リベルタ

13 1947年に設立された、自由主義を称揚する国際組織。創設者メンバーにはハイエクの他にもカール・ポパー、ルートヴィヒ・フォン・ミーゼス、ミルトン・フリードマンなどがある。

ス」、そして『セールスマン』でしか見かけない、もうすっかり忘れ去られた存在となっている。そしてそこでも、留保無しに、という訳にはいかない。

ただ、10年後にイデオロギーが風向きを大きく変えたため、皮肉の相手を変えたい誘惑に駆られるかもしれない。そしてオステルーの確言からわずか数年後、自由主義イデオロギーの復活にとって非常に意義深い政治現象がノルウェーで起こったのだ。それはつまり、税金や公共料金の大幅な引き下げや、公的な介入の減少を訴えるアンネシュ・ランゲ党の発足である。

『セールスマン』や「リベルタス」を政治的な部外者^{アウトサイダー}の立場と見なさなければならぬ場合、1950年代および1960年代のアンネシュ・ランゲ（1904～1974）のような人物はより一層そうであると言えるだろう。ランゲは1930年代においては「祖国」グループの活動的なメンバーだった。1940年より前は、彼も計画経済や協同組合的な考えに強く影響を受けていた。しかし戦後、彼はより自由主義的な思考により惹かれるようになった。ランゲは『犬新聞（Hundeavisen）』——後に『アンネシュ・ランゲ新聞』に改称——の刊行や、多くの組織を通じて、自身の政治的およびイデオロギー的なビジネスを営んだ。

1973年に彼は、ノルウェーの政治状況に不意に訪れた政治的勝利を経験した。ランゲは税金や公共料金、公的介入を大幅に削減するためにアンネシュ・ランゲ党（ALP）を設立し、4つの議席と5パーセントの得票率を獲得してストーティングへと漕ぎ出した。

ALPは、何よりもまず、ますます全面的になっていく国家権力に対する、ポピュリストティックな抗議運動だった。その意味で、この党は1800年代半ばの農民反対派とある種の類似点があった。党の初期段階を見れば、明らかに自由主義的な特徴を見出せるだろう。しかし、徹底的な、一貫性のある自由主義的な基盤は全く存在しなかった。この党および党首のイデオロギー的・政治的土台は非常に複雑で、保守的な権威主義の要素が自由主義的な考え方の要素と、隣り合わせで存在していた。〔そのため〕ALPは、フリードリヒ・ハイエクの支持者、アイン・ランドの支持者、そして南アフリカのアパルトヘイト政策の支持者を心から歓迎することができた。

ALPは単なる政治的エピソードのひとつのみであることもできたかもしれない。この党が次第にそれ以上のものへと発展したとき、それは非常に性格が異なる要因によってそうなったのだ。それらの中には、間違いなく政治的な巡り合わせと、非常に優れた政治的職人技があった。私たちの文脈においては、次のことが特に重要だろう。それはまず、1970年代半ばから起きた国際化、とりわけ1980年代のそれは、多くの点で1930年代と正反対であるということだ。1930年代における10年間は、古

典的経済学および資本主義にとっての危機の時代だった。1980年代にとっては計画経済と社会主義の危機であり、それには1989年の秋における東欧の動向、そしてそのクライマックスとして、その劇的な証明としてのソビエト社会主義の崩壊が伴っていた。1980年代は、ヨーロッパの福祉国家にとってもある種、危機的な時代だった。福祉国家が引き受けた全ての課題を解決するという問題が、ますます差し迫ったものに映った。最後に、1980年代は社会経済におけるケインズ主義が理論的危機を迎えた時代だった。ケインズの介入主義的解決策は、もはや機能していないようだった。

1989年以降は、経済発展およびイデオロギー的風土の両方がいくらか混迷していた。旧ソビエト連邦の地域および東欧の発展は、一部地域においては自由主義的な解決策のための良い宣伝材料となっている。だが、他の場所ではそうではない。とはいえ計画経済および国家的な統治からの転換は、世界の他の場所でも顕著になってきている。それは経済の自由化が驚くべき景気向上に繋がった中国やインドで最も明確に見られる。世界的に「グローバリゼーション」という言葉が流行語になったが、それは一部の人にとっては侮蔑語となった。

言い換えれば1980年代とは時代の変化を意味していた。80年代以降の時代は、自由主義的な思考様式にとって、重要なルネサンスを経験したということで特徴づけられる。自由主義思想は、イデオロギー的覇権をめぐる真剣な競争のただなかにあったし、それは今でもそうである。このことは、単に1980年代の政治的勝利者——アメリカにおけるレーガンおよびイギリスにおけるサッチャーの信奉者たち——の自由主義的な要素を見て明らかだと言っている訳ではない。少なくともその反対派たちを見ても、時代の変化は同じくらい明白である。例を挙げれば、ビルおよびヒラリー・クリントンのイデオロギー的内容を、1960年代のリンドン・B・ジョンソンやヒューバート・ハンフリーのイデオロギー的観点と比較することができるだろう。あるいは、英国の労働党を見ても明らかである。トニー・ブレアの「新しい労働党」のイデオロギー的綱領は、1960年および70年代の同党の社会化への熱意と、特に接点を多く持っている訳ではない。

ノルウェーでは、1980年代初頭の「右翼の波 (Høyrebølgen)」と呼ばれる時期において、明白な自由主義的要素があった。ノルウェー労働党 (DNA) はといえば、明らかに守勢に回っていた。80年代半ばの同党の「自由運動 (Frihetskampanje)」のような現象は、そのような特徴を宿している。80年代には、今日ではまったく考えられないような立場——例えばノルウェー放送協会 (NRK) による〔放映権の〕独占などが、労働党においては当たり前のことと見なされていた。総じて注目されるべきなのは、自由主義に関連する観念は、ここ20～25年間において、政治的境界線を

超えて目に見えるインパクトを与えてきたということだ。社会主義左派陣営において、社会主義的計画経済の導入を求める声がほとんどないということが、このイデオロギー的環境をよく表している。そしてこのイデオロギー的環境を表しているのもう一つ大変重要なのが、社会の一般的な発展に関しても、政府やストーティングでの政治的思考に関しても、「市場自由主義」という言葉が、一種の侮蔑語として広く使われるようになったということだ。この言葉は労働党主体の政府に対しても使用されている。この歴史的・イデオロギー的観点において、私たちは、1980年代から今日に至るまでの、より洗練され一貫した自由主義勢力を位置づけなければならない。

このことはなによりも、進歩党 (Fremskrittspartiet) の内部およびその周辺の非常に強い自由主義的要素といった、より広範な政治的文脈に関わっている。1980年代、進歩党の青年組織 FPU の内部およびその周辺で、自由主義派の強力なグループが形成された。このグループは1989年以来ストーティングに登院している。数年間、非常に純粋な自由主義がこの党における強力な潮流だった。最も知名度の高い代表は、ストーティングの議員であり、副党首のトール・ミッケル・ヴァラ (1964～) とポール・アトレ・シャルヴェンゲン (1960～) だった。自由主義の潮流は、他のイデオロギー的潮流、とりわけさまざまな形態の右翼ポピュリズムと緊張関係にあった。しかし、自由主義の潮流は、党首のカール・I・ハーゲン (1944～) でさえ明らかに影響を受けたほど強力だった。

90年代の初め、進歩党内部で、純粋な自由主義者と他の潮流との間の対立がより明らかとなり、1994年にハーゲンと同党の多数派は、自由主義的潮流と袂を別った。その後も、進歩党はみずからのことを自由主義的な党であると主張し続けた。しかし、イデオロギーと政治における自由主義的要素は非常に弱体化し、断片化した。同党から離脱した自由主義者のなかには、その後保守党やノルウェー自由党に加わった者もいれば、政治から身を引いた者もいた。

進歩党の外部では、1994年前後に、知識人の小さな自由主義グループが存在していた。『セールスマン』は1989年まで完全なかたちで存続し、程度の差はあれ自由主義的考え方を特徴として持っていた。同誌の自由主義的側面が洗練されたのは、オーレ・ヤコブ・ホフ (トリグベ・J・B・ホフの息子) が1983年に編集者に就いてからの数年間だった。さらにイデオロギー的に純化されたグループは、1980年から2001年まで発行され、現在はインターネット上で存続している雑誌『自由についての思想 (Ideer om frihet)』誌の周辺に存在していた。1994年に進歩党から離脱した自由主義者たちを集めたものの、組織化に失敗した政治的試みである「自由民主主義者 (Fridemokratene)」という組織も、純化された自由主義と呼べるかもしれない。独特の

哲学者・作家であるアイン・ランドの信奉者たちも、さまざまな組織のもとに集まった。

他のノルウェーの公衆における自由主義的要素の内では言及しなければならないのは、インターネット上の多くの自由主義的特徴を持つブロガーたちである。彼らは、現在進行中の出来事と主要なイデオロギー的問題の両方について、自由主義的立場を出発点として、定期的または不定期にコメントしている。2007年の時点でもっともよく知られているのは、ハイディ・ノルビュ・リユンデ（1973～）とそのブログ「VamPus' verden」である。彼女は進歩党の自由主義青年グループ出身という背景を持っている。最後に、シンクタンク「Civita」は、2004年以来、自由主義的志向の議論によって、ノルウェーの公衆に影響を与えようと試みている。

今日のノルウェーの自由主義を見ると、1700年代および1800年代の、自由主義がメインストリームを形成していた頃に遡ってみても、細い糸以外のものを見つけるのは難しいだろう。コルビェルンセンやシュヴァイゴーから途絶えることのないような伝統を語ることはほとんどできない。より広い視野で見れば、1800年代に反対的な立場をとっていた農民政治と、進歩党の特定の要素との間に親和性を感じるだろう。もしかすると、ポピュリズムと自由主義の混淆の内に、ノルウェー独自の伝統を見て取ることもできるかもしれない。しかし、歴史的展望は主として次の通りでなければならない。つまり自由主義は、ノルウェーにおいては広範な、時には壮大かつ強力な、古い伝統的な思想である、と。1800年代の末からそれは徐々に衰え、廃れゆくように見えたが、過去20～30年間、〔自由主義にとって〕好ましい国際状況において、新たな自由主義が政治的な議題に再度上ることになったのだ。

凡例

- 一 本稿は、Øystein Sørensen, 2008, “Liberalismens historie i Norge,” in: *Tre essays om Liberalisme*, Oslo: Civita, P. 5-30. の全訳である。
- 一 □ 内は訳者による補足である。原文のイタリック体の部分は傍点で強調されているが、引用文についてはその限りではない。
- 一 人名・地名などのカナ表記については、百瀬広・熊野聰・村井誠人編『北欧史上・下——デンマーク・ノルウェー・スウェーデン・フィンランド・アイスランド』（2022年，山川出版社）にある程度準じているが、Struensee に関してはその出自がドイツ系であることを考慮し、シュトルーエンゼと表記した。
- 一 註は全て訳註である。

◆解題

ここに訳出したのは、ノルウェーの歴史学者オイスタイン・ソーレンセンが2008年に『自由主義についての三つの試論』に投稿した論考である。1991年に彼が『自由についての思想 (Ideer om frihet)』誌に発表した論文に加筆修正を加えたもので、最終章にあたる「自由主義よもう一度？」において、その加筆修正の痕跡を認めることができる。既に同書は絶版となっており、いくつかのサイト上でこの論考（および1991年に掲載されたバージョン）を読むことができるが、底本としては発行元であるノルウェーのシンクタンク「Civita」のHP (<https://civita.no/>) 上で無料公開されているものを選んだ。

内容について言えば、おそらく日本で手に入るノルウェー史関連の書籍では、最も詳しくノルウェーの自由主義思想を取り扱ったものとなっているのではないだろうか。これは単に北欧史研究自体がかなりマイナーなジャンルであり、かつノルウェーという国自体が、隣国であるスウェーデンやデンマークに比べて知名度が低いことがその理由として挙げられるだろう。実際、ノルウェーは長らくの間デンマークおよびスウェーデンとの連合関係にあり、真に独立を果たすことになったのは1905年のことだった。だが、それでもやはりデンマークとの連合関係を解消し、かなりの権利を取り戻すことができた1814年がやはりノルウェー独立の象徴とされる。それはひとえに当時のヨーロッパでも群を抜いてラディカルだった「アイツヴォル憲法」の存在が大きいのだが、本論ではまさにその憲法成立の話から始まり、そこからおよそ2000年頃までの約200年を概観するものとなっている。そこには、現代でも連綿と続く北欧の「福祉国家」像の原点を見つけることも可能だろう。

次に翻訳について述べておこう。原文にある *liberalisme* およびその派生語 (*liberal* 等) は、全て「自由主義 (的)」と訳した。これは本稿において、いわゆるアメリカ的な「リベラル」概念よりもむしろ、アダム・スミス以来の古典的自由主義の伝統が問題となっているためである。

実際の作業の分担としては、まず山下が大部分の下訳を作成し、大谷がそれをチェックするという形で行われた。ただし最終章「自由主義よもう一度？」のみ、前半を山下が、後半を大谷がそれぞれ下訳を作成し、もう片方がそのチェックを行っている。また、訳註は全て山下による。

とはいえ、訳者はどちらもノルウェー史を専門とはしていない。山下は戦後ドイツ文学、大谷はルーマニア思想を専門としているため、翻訳については細心の注意を払ったが、些か不明瞭な点が残っているかもしれない。もしも誤訳等分かりづらい箇所

があれば、ひとえに訳者の責任であり、ご叱正頂ければ幸いである。

また、本論考は私（山下）と大谷が二人で行った「アレなノルウェー語読書会」が元となっている。その様子は、全て株式会社ゲンロンが運営する映像配信プラットフォーム「シラス」上に残されている。もしも読書会の様子に興味を持たれた方がいたら、是非シラスのアーカイブ機能を使ってご覧頂きたい（ただし冒頭30分のみが無料で、以後は有料となるため注意）。

最後に、本論文の翻訳を快諾して下さった Civita のマリウス・ドックスハイム氏ならびに著者であるソーレンセン氏には感謝の意を記しておきたい。特に著者には、既に執筆から何年も経過しているにもかかわらず、訳者の突拍子もない質問にまで親切に答えて下さった。また、「シラス」の配信という機会がなければ、この翻訳は最後まで行えなかっただろう。併せて感謝したい。そして、共訳者である大谷氏にも大変お世話になった。最初彼から「ノルウェー語で何か読まないか」と誘って頂かなかったら、そもそもこの企画自体生まれなかった。

拙訳をきっかけに、ノルウェーに少しでも興味が湧いてくれる方が増えれば幸甚の至りである。

訳者を代表して 山下

著者紹介

オイスタイン・ソーレンセン (Øystein Sørensen, 1954-) : 専門はノルウェー現代史。とりわけ、全体主義やナチズムの歴史を専門としている。現在、オスロー大学歴史学科教授。近著に Mathilde Fasting との共著 *The Norwegian Exception?: Norway's Liberal Democracy Since 1814* (Hurst & Co Ltd., 2021) がある。